半ばに彼は〈すばらしいメッセージを持った人物〉としてエレクトロニクスの世界に颯爽と登場した。世界は突如として線的思考の自己中心的な考え方の時代から〈地球村〉の時代へ変身したのである。

彼の理論（必ずしも彼の理論ではないかも知れないが）の一つの解釈によれば、世界は活字の発明によって根底から変わってしまったというのである。本（あるいは本屋）が存在する以前には人々は自分がまわりの世界の中心だとは考えなかった。自分の村の絵を描く時にはそのすべてを描いた。人間も物も、壁の内側にあるものまで、つまり、屋内にあるものも屋外にあるものもなにもかも描いた。彼の心の中では自分が絶対的な観察者なのではなくて、単なる総体の中の一部にすぎないのである。

活字の出現（やがて視界いっぱいに拡げて読む新聞が登場する）が人間を自己中心的にし、とりわけ資本主義を、頑固な個人主義を、スーパースターたちを、自殺を生み出した。綴り字がやかましくいわれるようになり、社会の敗残者が発生する。

活字（ホットなメディアである）はルネッサンス時代の人々の自意識を目ざめさせ、ひどく理窟っぽくした。彼らはあらゆるところに、時にはそんなもののあるはずのないところにまで因果関係をこじつけるようになった。

これが各地で起った魔女、異教徒、作物を荒らした者たちの焚刑の原因である。

マクルーハンの考えによると、人々を自分が中心にいる活字の世界から引きずり出してくれたのは、テレビ（これはクールなメディアである）である。その小さな箱の中に人が見るものは、見ている人のことに一切注意を払わずに必死に何事かをやっている他人の姿である。かくてテレビを見る人はもはや批判的な観察者ではない。その他大勢の中の一人となるのである。

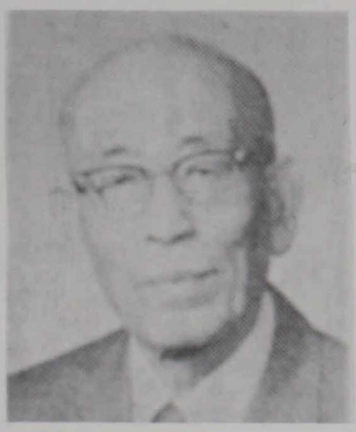
マクルーハン氏は昨年十二月三十一日、トロントの自宅で病死した。六十九才だった。一昨年脳出血で倒れる前の同氏は、大脳の右半球と左半球の機能について関心を抱いていた。研究によれば右半球は空間的、情緒的、直観的なプロセスに関係をもっており、左半球は言語、因果関係、知的分析的な思考を受け持つという。

したわれる日系一世の医者

宮崎政次郎

ブリティッシュ・コロンビア州のバンクーバーから北東へおよそ七、八〇キロのところにリルエットという小さな町がある。山また山という山岳地帯の谷間にあって、かつては太平洋沿岸からカリブー金鉱へ通じる山道の宿場町としてにぎわっていたところである。

宮崎政次郎氏はこのリルエットの名誉市民であり、この地区の歴史学会の元会長であり、またカナダ勲章の受勲者でもある。日系カナダ人や、その他の宮崎氏を知る多くの人々の間では、ドクター・ミヤザキとして親しまれ、尊敬されている。



宮崎氏は一八九九年（明治三二年）、滋賀県彦根市開出今町（昔は村）で生まれ、十三才のときカナダへ渡った。その後、生活費をすべて自分で稼ぎながらハイスクール、大学（ブリティッシュ・コロンビア大学、ミズリー州カークスビル医学大学）へと進み、バンクーバーで開業する。「カナダの萬蔵物語」（森研三、高見弘人共著）は、宮崎氏についてこう記している。

「一九三〇年から一九四二年までバンクーバーで患者を診ていたが、その後ブリッジ・リバーとミント及び東リルエット地方へ移った。戦争のため立退かされた日系人同胞を治療のため、ブリッジ・リバーへ強制的に送られた。

一九四四年暮、リルエット町のピーター・パーターソン医師が死去したため、同町は無医師になった。このためB・C州のセキュリティー（保安）委員会は、日系人ながら信頼のおける宮崎ドクターをリルエットに移らせ、町民の診察と治療に当たらせ、同医師は翌四五年三月三十一日以後同町で、まことに献身的な診療をつづけた。

このような行為が町民の絶対的な信頼となり、一九五〇年十二月、宮崎ドクターは町議会に当選した。日系人として町議になったのは同氏が最初であり、同胞に自信と勇気を与えた。（註・カナダの町議や市議は、定数が日本よりうんと少なくて権威がある）。

その後、一九七〇年三月二十一日、当時の総督ミッチナー氏からボーイスカウトに貢献した実績で功績勲章を受けることになり、B・C州副総督より叙勲された。

宮崎ドクターはB・C州奥域のボーイスカウト理事会主事である。一九七〇年